

研究テーマ「個が生きる授業」について

研 究 部

1. 授業の機能

教育活動は、子どもたち一人ひとりの人間性を高め、深める営みである。ところが「高まり、深まるとはどういうことか」との定義となるとはなはだ困難である。一人の教師がこうあるべきだと思って指導したとしてもそれが果たして正しい教育であるかどうか客観性は求めにくい。たとえ正しいとしても最善とは言い切れまい。

教育はこのように、正しい方向を決めること自体困難なことであるのに、方法となるとさらに難しいことである。したがって、社会背景や時代と共に教育の課題は移り変わっても、それが究明されることなく繰り返され、昔からの永遠の課題として現在まで残っているものが多い。

こうした課題の中に、「意欲をもって学習に取り組ませるためにはどうすればよいか」「主体的に学ばせる授業とは」などがある。

本校で取り上げている「個が生きる授業」も、こうした課題の一つであり、未だ究明されない重要課題である。

教育界には、ほとんどの人が正当性を認める理論は先行しても一向に子どもの姿は変わらない現実がある。理論と実践の遊離現象は教育研究においては特に多いのではなかろうか。それは、すべて相手が人間であることに起因している。同一の方法で同じように接しても、結果として育つ姿は同じにはならない。教育作用はこうしたものだから、仮説を立て、方法を変えて実践し、その結果を比較対照しても、科学の実験のように明確な結論は導き出しにくい。子どもであってもすでに固有の人間性を備えている人間を対象としたものであるから法則化しにくい要素を多く含んでいる。教師サイドから言えば「育てる」ことであっても、育つのは子どもである。生まれも、生活環境もすべて異なる子どもたち一人ひとりが、自分の意志で育つのであり、「個が生きる」ためには個々の子どもに伸びようという意志・意識をもたせることと言えよう。

今年度は、「個が生きる授業」のあり方を求めての2年次であるが、「個が生きるとはどういうことか」の結論は、いまだに統一見解に達していない状態である。何回かの研修会議を通して話し合い、確認し、集約したことは次項以下に記す通りであるが、これを踏まえて今年度は本校の教師のそれぞれの「個が生きる」ことへの考え方に主体性をもたせ、それぞれの実践を本誌に集録した。

2. 授業で何を育てるか

授業を通して子どもたちに身につけさせたいことは、およそ次のようなものであると考えられる。これらのことを確かに定着させていくことが人間性を育てる学校教育のしごとであろう。

- ① 学習内容（短時間・非訓練的・達成目標的）
学習内容を身につけることによる人間形成
 - ・それぞれの教科や領域によって変わる。
 - ・1時間の授業ごとに変化発展する。
- ② 学習方法（長時間・訓練的・方向目標的）
教科や領域特性を身につけることによる人間形成
 - ・各教科や領域に固有な学習方法を身につける。

・一貫性のある指導によって身につく。

③ 学習態度（規律）（長時間・訓練的・蓄積性・方向目標的）

各教科や領域に共通な学習規律を身につけることによる人間形成

・全ての教科や領域の中で一貫した指導を通して身につく。

とかく、授業における本時の目標に記される内容も学習態度に関わるものは少ないようであるが、自分の発想・考えをどう出すか、他人の意見をどう取り入れるかといったような人間同士のふれ合いに関わることで、家庭で、また個人で学習するのではなく、学校という集団の中でこそ体験できる学校教育の使命であるとでも言うべき重要なことがらである。

3. 「個が生きる」ということ

明治中期のペスタロッチ教育学隆盛の頃から、学習指導の原則として「児童の固有の能力を開発する」「教師の教え得るものでなく、児童の学び得るものである」「児童の理解し得るものを教える」など、現代と同じように個々の児童に目を向けた、児童の主体性を重んじる教育論が唱えられている。それほど、重要でしかも未解決な課題と言えようが、本校の研究テーマである「個が生きる授業」も理念を異にするものではない。「個を生かす」でなく「個が生きる」と表現した訳は、学ぶ主体者は児童であるし、児童自身が学び、伸びていこうとしない限り教育は成立しないことを強調したいがためである。言うなれば、「個が生きる」とは、個それぞれが「自分を意識し、自分で伸びようとする意志をもつ」ことである。

個が生きる教育においては次のことを大切にしたい。

(1) 個に着目した人間尊重の教育

生まれた時から固有の特性に加えて、生活経験の違いなどから、小学校段階においても、個性に相当の違いが見られ、個人差も生じてきている。こうした子どもたち一人ひとりに目を向けて、「その子にとって今一番望ましい対応はどうあるべきか」を絶えず考え、実際に手を施すことがまず基本ではないかと考えられる。その際、教師の一人よがりになる危険性も含んでいるので、できるだけ複数の教師で見えていくことが大切ではなからうか。本校では、教師の個性も重んじて、1学級に数人の教師が関わって授業を進めている。いわばチーム・ティーチング方式ともいえる方法をとっているが、教育には最善の方法が見つからない限り、こうした主観を複数集めることによる客観性を求めるしか方法がないようにも思える。

(2) 基礎・基本尊重の教育

教育において、「子どもそれぞれに個性があって、それぞれのよさを伸ばしていく」ということはよく聞かれることである。確かにそれができればとてもすばらしいことではある。たくさん子どもたちの中で、ごくわずかの子どもが、自分の個性を伸ばして花開いたという事例はめずらしくはないが、すべての子どもがそれぞれの個性を伸ばして大成したという話はほとんど聞いたことがない。小学生の段階ですべて子どもの個性など見抜けるものでもない。

小学校段階においては、生まれ持っている固有の特性に、将来自分で個性を創り上げていくための基礎・基本的な知識、技能、能力、態度を身につけておくことが最も重要であると考え。それぞれの子どもに、個性を育てるよりも、個性を各自が育てていくためのよりどころとも言うべき、基本型を身につけてやるのが小学校教育の使命ではなからうか。

(3) 集団との関わりを大切にす教育

学校が持つ、最も大きな特色・機能といえ、人間同士のふれ合いではなからうか。子どもと教師、子ども対子どもの関わりを通して総合的な人間としての生き方を身につけていくのである。狭い意味の学力のみを身につけるのであれば、家庭にいて、優れた個人指導の教師について学ぶ方が

効率的であるかも知れないが、調和のとれた人格形成は望めないであろう。また、個の存在感は個を取り巻く周りの集団に照らして生じるものであり、自己を自覚できるのも集団の中に属しているからこそである。

教師の教育作用よりも、集団の教育作用の方が人間形成においては大きいのではないかと思えるほど集団との望ましい関わりの場をもたせることは、個が生きる教育を考える時、重要な要素である。

「個が生きている」ことを、子どもサイドからみた時、つぎのような意識をもたせる授業のあり方を求めていくことが大切ではないかと考えられる。

- ① 今の自分がわかる……現在の自分の状態が見える。「何がわかって何がわからないか。」「どこまでできてどこができていないか。」
- ② 存在感がある……無視されない、認められる、寄与する、反論される、ほめられる、主張する
- ③ 意欲が生じる……やり方がわかる、見通しが立つ、可能性が見いだせる
- ④ 達成感がある……できるようになった、わかった、知った、覚えた
- ⑤ 満足感がある……精いっぱいやった、おもしろかった、協力した、助けてあげた、気持ちを通じた、「～してよかった」
- ⑥ 表現できる……気持ち、思い、考え、発想の表出・交流
- ⑦ 変容の自覚がある……「△△な自分から〇〇な自分になった」
- ⑧ 自分流の思考活動ができる時間・場がある
- ⑨ これからの自分の課題がわかる

4. 教師の役割

「個が生きる授業」を求めていくとき、教師として心がけなければならないことは、つぎの諸点であろうと考える。

- ① 子どもの実態を知る。
- ② 指導性を発揮することをタブー視しない。
 - ア 教えることは教える（子どもに任せることと教えること）
 - イ 正否を評価する（正しいことは正しい、まちがいはきっぱり）
- ③ 学習活動の方向を明示する。
- ④ 適度な抵抗感のある教材を用意する。
- ⑤ 思考や表現を誘発する工夫をする。
 - ア 教材・教具の工夫や提示
 - イ 発問 「ゆさぶり」「切り込み」「引き出し」「くだき」「しほり」
- ⑥ 多様な価値基準の用意（評価尺度の多様性）と個に応じた適切な対応。
- ⑦ 教師の持ち味を生かしたティーム・ティーチングの授業システムの工夫。

5. 研究の重点

これまでのように、個々の児童が発想を出し合い、深め合いながら学習活動を展開し、個々の児童がより確かな学力を身につけることをねらいながら、これまでの研究で弱いもの、曖昧なもの、欠けているものとして次の諸点にも視点を当てていく。

- ① 各教科・領域に共通な大まかな問題解決のプロセスはあるが、教科・領域の特性が見られる

ようなプロセスを設定して、学習のしかたを培っていく。

- ② 各教科・領域に共通する学習態度（規律）に関する指導を全教官の共通理解のもとに積み上げていく。特に「聞くこと」「話すこと」に重点をおく。

（学年発達段階に応じたステップを設定する必要がある。）

- ③ 教師の指導性を発揮するために、授業における教師の役割に視点をあて、授業観察においては、教師の手だての妥当性を子どもの姿に照らして検討する。

また、基本的にどの教科の指導においても共通に踏まえておかなければならないこととして次のようなことが挙げられる。

- 課題（めあて）は共通でなければならない。（方向の共通性）
- 到達度は同一レベルを求めない。（到達度の段階性）
- 方法においては多様性が認められねばならない。（方法の多様性）

6. 課題及び問題点

近年の学校教育では、個に着目した教育研究のテーマが多く掲げられている。

個に着目することはよいことであり、人間である以上みんな人権は尊重され、個の尊厳を失うことがあってはならない。それは当然のことであるが、現実の学校や家庭教育において、個をだいたいすることとわがままにすることが渾然としてきているのではあるまいか。

教育は、人間として身につけなくてはならないことを習得して、より望ましい人間へと進歩していくことを目指すものであるから、子どもの自由気ままな活動を尊重してやるわけにはいかないのである。そこには必ずある方向に向かっての指導が必要である。

反面、個よりも集団に着目した教育思想もあるが、集団を重視すれば形の上で秩序が保たれ、統制がとれたような錯覚に陥ることになる。人間だれしも他からの目は意識するものであり、他からの眼差しによってコントロールされる面を多く持ち合わせている。したがって集団に拘束されて形をつくられた中で人間が育っていくように見える。しかし、そのことは人間が本来もっている「拘束されたくない」とか「自由を求めたい」などということに矛盾するものである。

こうしてみると、個の自由気ままだけでは、人間の高まりは望めそうもない。かと言って、集団を重んじると個の尊厳が埋没することにもなりかねない。

本校においては、先に述べたようにある程度の共通見解に立って、しかも個々の教師の指導観も尊重しながら研究を進めてきた。本誌はその集録であって、いわば主観の複数化によって客観性を見いだそうという趣旨のものである。

「個が生きる」ということを狭く捉えて、指導法における個別化に終始してもいけないし、広く捉えて平等主義的な発想の中に個の尊重の精神を埋没させてもいけない。独断と偏見になつては、さらにいけないことである。こうしたことを自戒しながら1年間研修を積んできた。

「こうすれば個が生きる」という結論には到底及ばないが、子ども一人ひとりに目を注ぐことを最優先し、個が生きる条件をひとつずつ探りだしていこうとしてきた足跡としてその実践を記す。